

土壤保全事業の役割について

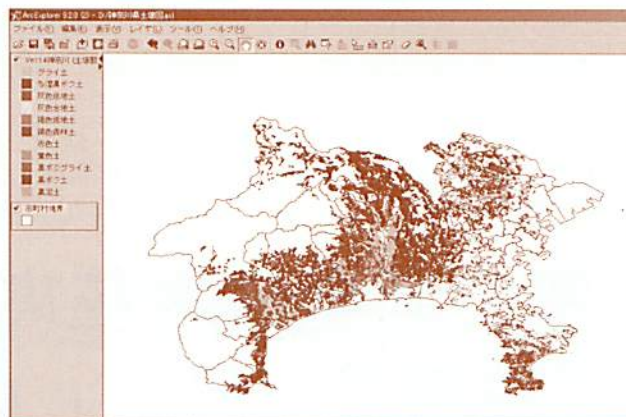
農業環境研究部

土壤保全事業は各県が連携して農耕地土壌について、土壌の理化学性の実態と管理状況を調査しており、過去60年の歴史があります。土地は動かないものとされていますが、農耕地土壌は施肥や耕耘などの「土づくり」により維持管理されており、土壌の理化学性は常に変化しています。

農業技術センターでは、県内の農耕地約80地点について、毎年約20地点ずつ4年間かけて調査を実施しています。現地での土の色や性質の調査、さらに土を持ち帰って化学性や物理性を分析します。この調査結果に基づき、土壌を種類毎にまとめると、図のような土壌図を作成することができ、土壌とその利用の可能性について検討するための資料となります。

理化学性の調査からは、平成15年に取りまとめた畑地土壌では黒ボク土のpHの平均は6.24でやや高めとなっています。またECは0.18 dS/mで適正な値でした。表に示したように土壌中の全炭素と全窒素について、過去の値と比較してみたところ、黒ボク土では炭素量が増加しており、有機物の施用が進んでいることが考えられます。このような土壌中の炭素の蓄積については、地球温暖化対策の一環として、温室効果ガスである二酸化炭素の土壌への吸収と蓄積量の把握、水田土壌からのメタンガスの発生状況を把握する上で貴重な資料となることが期待されています。

土壤保全事業のデータは農業生産の基盤である土壌の基礎的な情報として蓄積されています。このデータは今後の農業生産の計画立案の基礎資料となり、食料の安定生産や環境保全対策への対応に役立っています。



神奈川県土壌図

表 普通畑の全炭素及び全窒素の変化

調査時期	1巡目	2巡目	3巡目	4巡目	5巡目
	'79-82	'84-87	'89-92	'94-97	'99-02
T-C(全炭素%)					
黒ボク土	4.98	5.31	5.5	4.75	6.06
非黒ボク土	1.80	1.86	1.44	1.63	1.64
T-N(全窒素%)					
黒ボク土	0.34	0.38	0.38	0.35	0.45
非黒ボク土	0.15	0.17	0.13	0.16	0.14

当センター職員が日本土壌肥料学会賞を受賞

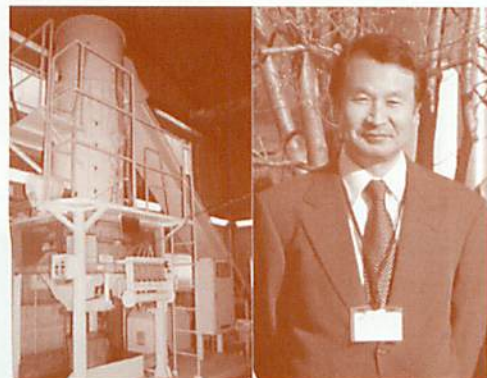
企画調整部

藤原副所長、学会賞を受賞

藤原俊六郎副所長（兼企画調整部長）が、第52回日本土壌肥料学会賞を受賞しました。

受賞内容：「有機性廃棄物の堆肥化による地域リサイクルシステム確立に関する研究」

都市生活や農業生産から派生する有機性廃棄物を堆肥化して農業生産に活用する地域リサイクルシステム確立のための研究が、顕著な業績として認められたものです。



竹本主任研究員、奨励賞を受賞

竹本稔主任研究員（農業環境研究部）が、第25回日本土壌肥料学会奨励賞を受賞しました。

受賞内容：「都市系生ごみの農業利用に関する研究」

奨励賞は、40才以下の若手対象の賞です。

